

カフカの『断食芸人』について

日 野 安 昭

外国語教室

(1974年9月11日受理)

Über Franz Kafkas „Ein Hungerkünstler“

Yasuaki HINO

Seminar der fremden Sprachen

(Received September 11, 1974)

In der Geschichte „Ein Hungerkünstler“ redet Kafka durch das Gleichnis des Hungerns von der Wahrheit und dem Schicksal des Künstlers. Der Hungerkünstler hungert seinem inneren Trieb gemäß, weil er hungern muß, „weil ich nicht die Speise finden konnte, die mir schmeckt.“ In seinem Geständnis angesichts des Todes liegt das Geheimnis der Geschichte. Er hungert nach einer unbekannten, wirklichen Speise, an der er sich vollessen kann. „Die wirkliche Speise“, die er nicht auf der Erde finden konnte, heißt die Wahrheit.

In diesem Aufsatz wird versucht, das Folgende aufzuklären, daß das Hungern die innere Notwendigkeit des Hungerkünstlers zum Leben ist, und was bedeutet das, daß der Hungerkünstler das Hungern zur Schaustellung macht. Dabei wird bemerkt, daß es falsch ist, seine eigene Auseinandersetzung, das Hungern nach der Wahrheit, zu veröffentlichen, wenn sie selbst auch richtig ist. Es ist doch seine Ehrlichkeit, daß er seinem Trieb gemäß hungert, um sich seines Lebens zu vergewissern. Wenn er sein Ziel erreichen will, muß er sich recht in die Einsamkeit zurückziehen. Gerade sie ist eine Form, die der Forscher der Wahrheit, der Künstler, haben muß. In der Geschichte ist die Erkenntnis des Dichters zu sehen, daß das Dasein des Menschen heute in einer zu schwierigen Situation liegt, um menschlich zu leben.

Der Hungerkünstler muß so hungern, wie Kafka schreiben muß. Sie beide tun es wegen des Selbsterhaltungstriebes.

カフカの場合、人間の生はきわめて過酷な状況におかれている。人は安心して立てる究極の砦からさえ追いつてられてよりどころもなくいわば浮遊している。もはや自己の使命と職業とが一致する幸福な状態を見出すことはできない。社会という波は、ひたひたと押寄せてきてついには個人の領域にまで浸みとおこり、すべてのものを相対化してしまう。そうしたなかにおいて、断食芸人のような人間は自分のおかれた状況を直視し、本当の基盤を求めずにはいられない自分を意識しつづけつつ、そうした自らの独特な立場を積極的に背負いこむ。それはけっして自己犠牲的な精神の発動によるものではなく、「自己保存の本能」からくるものである。

これからみようとするフランツ・カフカの物語『断食芸人』は、大きくわけて2つの部分から成っている。前半部では、断食芸人は成功をおさめ、名声と栄光のなかにおいて、不満をおぼえながらも内にいさぐ断食への欲求と彼の生とは均衡がとれている。しかしながら彼の栄光を支えていた流行の波がひいてよそに移ってしまうことによって、彼は変化を強いられた。これを転換点とした後半部では、世間の人々にみすてられたことを認めた断食芸人が、純粋に断食に生きるようになる。しかしながらこのとき、断食への欲求と彼の生への欲求とは分離されて真の食べものを求めて、断食しつつ死へと転がりおちる。なおこの物語では、カフカの物語手法の特徴として

バイスナー以来しばしば指摘される「作者と主人公のパースペクティブの一致」という現象は認められない。⁴¹⁾ 断食芸人も観衆も語り手という一点で結ばれている。

『断食芸人』を考察するにあたって、まず断食芸人が死の直前にもらず告白から入っていこう。それは断食をせずにはいられなかったものの血を吐くようにしてなされる告白ではあるが、カフカ自身の^{なま}生の告白でもあるといえよう。「わたしは断食をせずにはいられないからです。ほかにどうすることもできないのです。」「わたしは口に合った食べものをみいだすことができなかったからです。もしそれがみつかったら、たぶんわたしはセッションを起こしたりしないで、あんたやみんなと同じように腹いっぱい食べたことでしょう。」(S. 265)

断食芸人を断食へと促したものは、断食せずにはいられなかった内的な衝動であり、欲求である。けっして外部から強要されたものではない。彼の内を断食に対する止みがたい欲求が支配し、彼を断食へとつき動かすのである。この断食は、つまり断食芸人にとっては内的必然性に支えられた、彼のとりうるただひとつの存在のありようなのである。

断食とは、文字どおり食を断つことである。したがって断食という行為は、人間にとってはきわめて反本性的・反自然的な行為であるばかりか、生きていくうえで必要欠くことのできない食べものを拒否することであるだけに、人間の存立を根底から脅かすものである。食を断てば、そのいきつく先は死である。断食は、それ自体死への傾斜を含んでいる。

内的要請において始められた断食は、しかしながら、断食芸人が生存していくためには必要な条件であり、自分自身に向けられた行為であった。とはいえ、断食は彼にとって禁欲を意味するものではない。つまり欲して止まぬものに対する裏返しの表現ではない。それどころか逆に、彼にとってはアクティブな行為であり、それ自体にすでに意味がある。「食べるということは、考えてみただけでもう吐気をもよおさせる。」(S. 259) しかも彼の口に合う食べものはない。彼の断食の理由はここにある。断食せずにはいられないのは、この世の食べものがどれも自分の口に合わないからであり、自分の口に合った食べものがほしいからである。この世の食べものが口に合わない以上、それらの食べものを口にしないことを、つまり食べものの拒否を意味する断食に入らざるをえない。このとき、断食は断食芸人にとって積極的な意味をもって来る。断食は、つまりあるものを目指した明確な行為に転化するのである。断食芸人は、断食によっていままでえられなかった「本当の食べもの」、吐気をおぼえることのない、本当に安心して腹いっぱい食べられる食べものを求める。⁴²⁾ この本当の食べもの、未知なる糧

を求めて断食にはいり、この食べものを糧にして生きようと欲する。そうした強い欲求が彼の支えであり、食を断った人間を支える食べものに代る糧である。彼は、おのれの全存在を、求めてやまぬあの本当の食べものにふり向けた。⁴³⁾

断食は、断食芸人の全存在を要求するように、排他的な性質をもっている。断食芸人はほかにどうすることもできずに、一途に断食へと駆りたてられて、他の一切のものを副次的なものに追いやってしまうからである。断食は、彼にとって他のすべてのものを犠牲にしてまでも賭けるだけの価値をもち、しかも彼を断食へと駆りたてたものは、他のものと片手間にすることを許さないし、他のものとの並存を許さない。それは、裏返していえば、彼が内にかかえたものは、それだけ彼の存在にかかわる重要なものとしてあることを示している。それは彼が存在し、生きていくためには必要にして不可欠なものであり、彼の存在がひとえにそこにかかっているものである。この糧を求めること、それが断食芸人が自らに課した任務であった。

こうして彼がおのれの全存在をかけて求める本当の食べものは、この地上において見出しえなかったものである。したがってそれは、当然のことながらたんなる「食べもの」ではない。普通の食べものが世間の人たちの生を支えているように、それは断食芸人の生を支えるはずのものである。しかも、だれも彼に与えたりすることができない、自らかちとらなければならない種類のものである。それは、断食が肉体的な生と拮抗するものであるように、肉体的、物理的なものの対極にあるものであろう。すなわち食べものにしていわれる「食べもの」でないものである。断食芸人が死をかけてまで獲得せずにはいられないというところにこの本当の食べものの意味と性質とが語られている。それは断食芸人が確固として立てる「本当の基盤」(S. 260)にほかならない。断食芸人は、この「本当の食べもの」「本当の基盤」をえようと断食するのである。

断食をやめるということは、断食芸人には耐えられないというだけでなく、あの吐気をもよおさせる食べもの、つまりにせものにみちた生活へたち帰ることを意味している。それは断食とは比較にならないほどの苦痛であり、自己の存在の本質における死を意味する。彼の生は、逆説的ながら、断食をするということのなかに見出せるのである。にせものにみちたなか生きるよりも、死を賭しても、全存在を傾けて本当の食べものを捜すことの方をいさぎよしとする。この世の普通の食べものが魅力的であることはないし、彼を誘惑することもない。⁴⁴⁾ それは彼の嫌悪を引き起こすだけである。彼は具体的に生活していくうえで必要な食べものを拒否するばかり

か、それに係る生活や生存自体をも拒否せずにはいられない。⁵⁾ 断食芸人は、生を維持するものを具体的な食べものではなくて、未知の本当の食べものにみる。したがって、もはや彼においてはたんなる「生としての生」はその魅力を失ってしまった。彼は、断食の前提として、この世の普通の食べものでは生きるうえで不十分であるという認識をもっている。

未知の本当の食べものは、普通の食べもののように、実際に自分の目でみ、手で触れ、においをたしかめられ、味わうことのできるような把握可能なものではなく、その糧を求めるのに断食芸人が断食という手段に頼るように、むしろわれわれの把握を免れたところにある。この糧は、したがってすでにみたように、一方では他のすべての食べものを捨てさせて断食へと促す肉体的な死と深く結びついたものであると同時に、他方ではこれがあってはじめて人間が生きていくことのできるものとしてある。未知の糧は断食芸人にとっていわば両刃の剣となって働く。それでも断食せずにはいられないところに彼の「誠実さ」がある。そしてこの誠実さは、彼のいまだく欠如の認識に基いている。普通の食べものについて見出しえなかった「あるもの」(必要不可欠なもの)の欠如の認識こそが、彼をつき動かしていることは明らかである。

断食が、うまいと思うものがないからというだけの理由で行われたのなら、それだけでは断食は受動的・否定的な性格のものでしかないことになるが、断食芸人にとって内的必然であったことをみると、逆にひじょうに積極的な意味をもっていたことにわれわれは気づく。断食は、彼にとっては免れがたい生活様式であり、彼自身の内から出て、彼自身に向けられた義務でもあった。この未知の真の糧の探究は、私的な欲求であり、行為である。そしてこの探究は、本質において孤独な営みである。それは他人の助力も関与も不可能な、本人しか入れぬ領域である。カフカはヤノ・ホとの対話において次のようにいっている。「すべての人間が生きるために必要ではあるが、しかしだからとももらたり買ったりできないもの、それが真実です。人間のひとりびとりが自分の内部から真実をたえず生み出さなければなりません。さもなければ人間は死にます。真実のない生は不可能です。真実とは、おそらく生そのもののなのです。」⁶⁾ ここにいわれる真実こそ、まさに断食芸人にその欠如を嘆かせ、断食へと駆りたてたものにほかならない。彼は、「本当の食べもの」、つまり真実の見出せない生活を否定して断食に入った。

断食という行為は、その出発点においても、またその帰結においても個人的なものであり、どこまでも孤独な試みである。断食は、断食芸人がおぼえる自分の存在の

不確かさに対する確固とした存在への憧れと欲求の表現である。そこには未知の食べものによせる激しい食欲があつて、この食欲は、ふつうの食べものでは満たされることのなかったものがあること、しかも生を支えるうえで最も肝腎なものが欠けていることに気づいてこそ起こりうる食欲である。こうした食欲のうえに成立った断食は、断食芸人がおぼえる断食への暗い、だが確固として不可避な衝動と欲求に基いたものであつて、動機はまったく純粋なものである。

だがこの強い欲求も、断食芸人が断食を芸として見せものにすることによって断食自体の本来の意味と個有の性質とが歪曲されることになる。それは断食がそもそも断食芸人ひとりの問題であつたのに、それを公衆の目にさらすことから始まる。個人的な問題の探究という私的な営みが公の下に出されたとき、その営みのなかに含まれていた真実(個有の性質)は均され、うすめられて、その営みの主体からも観客からも個有の本質が奪いとられて風化する。断食芸人がたとえどれほど誠実に自己の要請に従って断食を続けていったにしろ、それが見せものであるかぎり、断食自体の真の意味は実現されることがない。

断食芸人は断食を芸にしたてて見せものにした。断食もまた芸であるとしたところに断食芸人の芸人たるゆえんがある。芸はそもそも見せものという要素をもっていて、観客があつてこそ見せものは見せものとして成立つ。芸としての断食はここにいたって断食を行うものとしての断食と、観衆にとっての断食という2つの側面をもつことになる。断食芸人にとっては断食の意味に無論変りはないから、彼はけっして観衆の目を盗んでこっそり食べたりすることなく誠実に断食するが、観衆にとっては断食はあくまでも見せものであり、娯楽にすぎない。しかも観衆の断食芸人に対する関心は、あくまで「流行」に基いたものであつて、観衆は断食を通して断食芸人と内的共感をもつて結ばれているのではない。⁷⁾ 彼らは日に日に高くなる宣伝の声に誘われてただ暇つぶしにみるだけのことである。彼らには断食が断食芸人にとってどれほどの意味を持つものなのか分からないし、分かろうとしない。したがって断食芸人と観衆とを結ぶ共通の糸といったものは最初から存在しない。

また断食はもともと観衆に誤解され、疑われるような要素を内包していた。それは、断食はけっしてたしかな目撃者、保証人をもちえないということにある。断食芸人には監視人がつけられて誠実に断食が行われているかを見張られる。「奇妙なことにいつも肉屋である」(S. 256)——彼らは断食とは最も縁遠い存在だ。事情に通じた人たちは、断食芸人が断食期間中はどんなことがあつてもけっして食べものを口にしないことを知っ

ているし、断食芸人にしても「芸の名誉」にかけても食べない。しかしながら観衆は、断食芸人が人目を盗んでこっそり食べものを口にしているのではないかという疑いを完全に捨てることはできない。なぜなら昼夜を問わず続けられる断食に対して一瞬たりとも目を離さずに監視し続けることは不可能なことだから。「夜も昼も断食芸人のそばでたえず監視人としてすごすことはだれもできなかった。したがってだれも自分の目で本当に、不斷に、間違いなく断食が行われていたかどうかを確かめることはできなかった。」(S. 257) 断食は、そもそも見せものとして人の目にさらされながらも、あくまでたしかかな目撃者、保証人を立てることができない、外からみればいかかわしいものでしかない。断食芸人が自分の芸に一点の不正もないことを証明しようとしても、それは観衆には自己弁護、自己正当化とうつつだけである。断食芸が芸としてあるかぎり、その奥にある断食そのものが理解されるということはない。断食が間違いなく不斷に続けられていることを知っているのはただひとりしかない。すなわち断食芸人だけである。彼だけはそれを保証できる。断食芸人はそれ故、断食する者であるとともに彼自身のただひとりの見物人になる。「断食芸人しかそれを(間違いなく断食がおこなわれたということ)を知ることはできなかった。彼しかだから、同時に自分の断食に完全に満足をおぼえた見物人になれない。」(S. 257) 断食にはこのように断食の完遂を保証できないいがかわしさがつきまといっている。またこの断食を行うものの存在のいかわしさもついてまわる。だから、彼は観衆から「宣伝がましい」奴だとか、「バテン師」だとか呼ばれることになる。そうした観衆の無理解や非難に断食芸人は耐えるよりほかにどうすることもできない。自己の正当性を証明しようとするほど、観衆の疑いと無理解は膨れあがって、彼の立場はますます悪化するだけである。「この無理解、無理解な世間と戦うことは不可能だった。」(S. 262) 断食の期間中に、不当な疑いから身を守ろうとして歌を歌って食べていないことをみせようとするれば、人々は「歌を歌いながら食べる彼の巧みさ」(S. 256) にただただ驚嘆するだけである。彼の断食芸はこうして観衆にとっては「歌いながら食べる芸」としかうつらない。無理解な観衆と断食にごまかしのないことを証明しようとする断食芸人との間の往復運動のなかで、断食芸人が断食するにいたった決意の大きさと重さ、そしてその衝撃性とは摩滅し、失われていく。断食への決意がどれほど重くとも、またいかに断食が断食芸人の存在の根底にかかわるものであろうとも、この断食そのものが真の意味において理解され、共感されて成立するには、芸という形はあまりにいかわしい。しかしながら、逆に真の理解と共感とをえられたと

き、この芸はあまりにも危険である。というのは、断食芸人がかつての生活をすてたであろうように、観衆もまた平穏な生活を破壊し、これまでの生を否定して断食に走らねばならぬからである。

観衆にとっては断食芸人はあくまで娯楽の対象であり、彼らは彼と彼の芸をその一点でのみとらえる。それ故、断食芸人は断食を芸とすることによって自ら断食の個有の現実を歪めてしまうのである。彼の断食そのものは真実であった。だがそれを芸に仕立てて見せものにし、職業にしたことは誤りであり、偽りであった。断食は芸となったとき、断食芸人がいだいた本当の食べものへの激しい欲求、真実の探究も、彼自身の手から奪いとられて白日の下にさらされ、打ちすえられてしまう。真剣で重大な私的な問題も、世間の人々は娯楽のたねにして楽しむ。断食芸人は、未知の本当の食べものをえようとするなら、完全な孤独のなかに沈潜しなければならない。それが彼にはできない。彼は断食を職業化することで、本来は副次的でしかないはずのものにとらわれてしまう。

やはり最後の告白のところで断食芸人は言う。「あなたたちがわたしの断食に感嘆することを、わたしはたえず望んでいました。」(S. 267) この欲求が彼の断食芸を芸として支えるものであった。

断食を芸としてさしだすとき、断食芸人は芸が人に賛嘆され、能力として認められることを要求する。そこに断食芸人にとっての落とし穴があったわけだが、それに気づくことなく、ただただそうした感嘆をえたいばかりに断食を続けることにもなる。内的必然から出たはずの断食は習性となるとともに、断食してえられる感嘆が断食芸人にとって生きる目的に転化する。その結果、断食芸人もまた断食の本当の意味から締めだされることになってしまった。

断食芸人の「感嘆されたい」という欲求は、断食を社会のなかで演じられるひとつの役割にかえてしまう。なぜなら職業は社会で演じられるひとつの役割なのだから。⁸⁾ この欲求は、断食芸人にとっては芸への感嘆とともに自己の存在への感嘆と肯定、さらには自己の存在の社会的承認を求めることである。したがって、彼は自己の人間としての存在を実現しようとする一方で、なおかつ社会的にも承認されようとする。断食芸は彼にとってはこの両方を一度にかなえることのできるものとして了解されているのだろう。彼は、したがって、まだ社会的な枠から抜けきれてはいない。彼は人に認められなくては自分自身を確認することのできない不安にとらえられているのである。その不安を振り切って無限の断食への欲求に従うことができずに、見せものとなっているかぎり、彼はあくまで演技者であり、芸人である。芸人であるかぎり、純粋に「断食するもの」、すなわち「未知の

本当の食べもの」の探究者にはなりえない。いかなる報酬も要求してはならないし、要求しえない、それが孤独というもののもつ必然というものであるからには、彼は自分の行為に「感嘆」などといった報いを要求してはならなかった。

断食芸人は人に感嘆されることによって生きる力を引出そうとする。いいかえれば、彼の生はそのかぎりでは、あの真の食べものによってではなく、感嘆されたいという虚栄心によって支えられていることになる。彼が熱狂的なまでに断食に身を任すことができたのも、この欲求があったからこそである。この意味では、人に感嘆されたいという欲求は彼にとって肯定的な意味をもっているが、逆にそうした欲求を引きおこされるという点において否定的な意味をもつものといえよう。つまり断食は本来どうすることもできない内的義務であったのに、それを自分だけにとどめておくことができずに、人の感嘆を求めて自己の存在の裏づけをはかろうとするからである。これは断食芸人の弱さを示すものでしかない。彼は本当の食べものを求める探究にひとりでは耐えられない。そのために外部にはげまし、支えとなる力を求めずにはいられなかった。自分の生を確かめ、実現するのに他人の援助を求めようとする。彼の芸は、つまるところ彼の「弱さ」のうえに成立っている。⁹⁾ それは墮落である。

ところでカフカは自分の作品とそれを公開することについて次のように言っているが、これはカフカの自作に対する根本的な態度とみることができる。同時にこれは、断食芸人の断食とそれを人に見せることとの関係にもあてはまる。¹⁰⁾『『それです。マックス・ブロート、フェリックス・ヴェルチュ、そうした友人たちがみんなわたしの書いたものをいつも取り上げては、それから出版契約済証をもってきてわたしをおどろかすのです。そうやってもともとはまったく個人的なスケッチだったり、書きちらしたにすぎなかったものが出版されるのです。わたしの人間としての弱さを示す個人的な証拠書類が印刷され、売られるのです。それも、マックス・ブロートを先頭に、わたしの友人たちがそれを文学に仕立て上げることをふと思いつき、わたしがこれらの孤独の証明書類を破棄するだけの力もちあわせていないからなのです。』しばらく間をおいて彼は声をかえて話をつづけた。『わたしがここでいったことは、もちろんたんに誇張にすぎず、わたしの友人たちにたいするちょっとした悪意でしかありません。実際にはわたしはもう、わたし自身がこれらのものを出版するのに負担するほど墮落していますし、また恥知らずでもあるのです。わたしの弱さのせいだということを口実にして、わたしはわたしの周囲の世界を実際以上に強いものにしているのです。これは当然

欺瞞です。』¹¹⁾

観衆から与えられる賛嘆は、断食芸人にとってはひとつの誘惑である。断食芸人はこの観衆の感嘆にさそわれて、断食を40日で中断させられるという断食に加ええられる暴力にも屈する。この感嘆は、彼の名誉心をいたく刺激するものであるがために、彼は自分の本来の目的に向かって努力することをはぐらかされて、いつまでも観衆にしばられている。¹²⁾ 名声に執着したとき、彼は断食のもつ本来の意味を忘れる。彼は名声に支えられて断食に励み、断食に励むことによって名声と観衆の感嘆とを期待する。なるほど名声は断食芸人の関心事にはちがいないが、それはけっして彼の本来の目的ではない。この名声は、彼を断食へと追いやった「未知の本当の食べもの」「本当の基盤」ではない、またその代償となりうるものでもない。名声と栄光に包まれていても、彼から不満が除かれることがけっしてないのを見ても、それは理解できよう。断食期間も終り、栄光の頂点でもあるはずのあの檻を出る瞬間ですら、彼は「自分からすすんで檻を出たことは一度もない。」むしろ檻から出されることに抵抗すら示さずにはいられない。

ところで断食芸人が浴する名声と栄光とは、断食が芸として成功するのに必要だったものと同じあの「流行」と観衆の物見高さ、享楽欲の強さによるものである。これはしたがって永続的なものではない。移り気な観衆の関心が他に移り、流行が断食芸人から去ったとき、彼の名声もまた消えるはかないものでしかない。しかしながらこのみせかけの栄光も、断食芸人によせる世間の人々の感嘆も、彼の芸が内包する危険から救い出してはくれる。虚栄心にとらわれて観衆に依存すればするほど、ますますどこまでも断食をやりぬく可能性は奪われる。際限なく続けられる断食は死につながるから、見せものとして断食期間を限定されるかぎり、断食芸人は死の危険から解放されるわけである。観衆の喝采は、断食を芸として成立させ、持続させていくためには必要ではあったが、「断食芸人にとっては必要なはげましではない。それは誘惑だ。」¹³⁾ 断食芸人は、彼を占有し、断食へとつき動かしたあの欲求、すなわち真実の探究を名声と栄光という虚構のうえにたてるといふ誤りを犯す。この虚構が虚構でしかなかったことが分かったとき、彼は断食そのものと向き合わざるをえなくなる。このときはじめて、断食は実体を伴うのである。

断食期間を40日と限定されることで断食芸人の不満は輪をかけて大きくなり、ついにあの間となって爆発する。「なぜ40日たったいま、やめなければならないのだ。まだ長いこと、限りなく長いこと断食にたえられただろうに。なぜ断食のまっ最中のいま（いな、まだ断食のまっ最中でさえなかった）やめるんだ。かつてないも

っとも偉大な断食芸人になる(恐らく彼はもうそうになっていた)ばかりか、どこまでなるか見当もつかないが、どこまでも自分自身の記録を書きかえる名誉を奪おうとするのだ。なぜなら断食能力に限界なぞおぼえないのだから。わたしにたいそう感嘆していると称しているこれらの人々は、どうしてそんなにわたしに我慢できないのか。わたしは断食をつづけるのにたえているのに、なぜ彼らはたえられないのだ。」(S.259)

まだ彼は思う存分断食したとは思っていない。40日という期間では不足である。それでも彼の意志におかましくなく断食を中断させられる。そこから生じる不満は、名声によっても埋め合わせることができない。この不満を理解できない観衆は、「彼の悲しみはたぶん断食のせいだ」(S.261)というぐらいしかできない。この世間の人々の無知が彼を絶望に突落し、「けもののように」檻の格子をゆすらずにはいられないほどの怒りへと駆りたててくる。この激しさは、断食芸人が、この観衆の言葉に、断食を中断させられるよりももっと強い、断食そのものに対する暴行をみていることによる。それは彼の存在の根底に加えられる暴行であるがゆえに耐えがたい。

断食が見せものとして成立つためには、観衆のほかに興行主を必要とした。興行主は断食芸人の断食を芸に仕立てあげて観衆に提供する。したがって、彼は断食芸人と観衆(世間の人々)との間をとりもつ仲介役をはたすわけだが、それも断食芸を自分の目的に利用するためでしかなく、当然のことながら彼の目的は商業上の成功をえることにある。彼は、観衆と同じように、商売上の友である断食芸人と断食によせる共感によって結ばれているのではない。彼にとって問題なのは「利益」だけである。¹⁴⁾ だから、容赦なく断食芸人に暴行を加えることができる。断食期間を40日と定めるのは、彼の商売上の経験からでたものでしかない。「40日だったら、たとえば、経験上次第に高まる宣伝によって町の関心をますますあおぎたてることができたが、それから以後はしかし、観衆を引きつけておくことはできなかった。評判は本質的に減退していくのが確かめられた。」(S.258)

断食芸人のことを思っていることでもなければ、断食に対する彼の理解からでたものでもなく、ただ観衆の関心と受容能力とに合わせただけのことでしかない。¹⁵⁾ 断食芸人が断食を中断されることによっておぼえる不満を、彼もまた理解することができない。したがって断食芸人の悲しみの原因もまた分からないまま、原因と結果とを倒錯するという誤りも犯すのである。

断食の中断は、けっして断食芸人の意にそうものではなかった。したがって、断食の後に待ちうけるお祭は、断食芸人にとっては勝利と栄光にみちた輝かしい瞬間となるはずなのだが、そうではない。逆に、彼の内は悲し

みと不満とにみたされている。祭は興行主にとっては興行の成功の頂点であり、観衆にとっては興奮とセンセーションの頂点であっても、断食芸人にとっては最も大きな苦痛の瞬間となる。¹⁶⁾ 外面的な華やかさと名誉心をくすぐる賛嘆とは裏腹に、内的苦悩は鋭く彼を突刺す。この祭において、断食芸人と観衆(興行主を含めて)との懸隔は越えがたいものとして鋭くえぐり出されて頂点に達する。

ここで少し断食芸人が断食をする場所、すなわち檻についてみてみよう。この小さな空間もまた断食および断食芸人にとって重要な意味をもっている。これはなるほど小さな空間ではあるが、断食芸人には生活していくうえで十分な空間である。彼はこの檻の狭隘さに不満をもちたことはないし、そこを去ることも考えつかずにいる。

この檻は人間がもちあるいている制約や拘束を意味する檻である。¹⁷⁾ だれもがそれに気づかない、あるいは認めまいとする檻である。断食芸人は檻のなかに引込むとき、人間の存在に枷としてはめられた檻を明確化し、それを自ら積極的に背負いこむ。彼にとってこうした檻は、人間としての生活の実現が困難な状態におかれていることを認識したとき、すなわちあの断食をせずにはいられない欲求におそわれたとき、すでにみていたはずのものである。自分がもちはこんでいる目にみえない檻を直視し、それを現実の檻という形にした。そしてそれを自分にはめこむとともに、世間の人々の眼前に据えたのである。檻のなかの断食芸人——それは人間のおかれた状況をあらわす象徴的な表現である。

あえて断食芸人が檻のなかに入るのも、真実から締め出されている自分を認めたくなくて、それをテコにして自己の実現を計ろうと企てるからである。真実から締め出されていることを知らないもの、あるいは認めないものには真実を求めて探検に出る決意も生れることはない。檻のみえないものや檻を認めぬものには断食芸人のもつ欠如の認識も不在の認識も生れない。したがって、そこから生じる未知の本当の食べものにおぼえる激しい食欲とも無縁である。檻は、断食芸人が自己のありように鋭い反省を加えたとき、はじめて引受けることができたものであり、断食が檻のなかで行われるように、人間としての生を実現するための究極の砦である。断食芸人がこの檻から自発的に出ることができないのも、この檻のなかにとどまることによってのみ未知の糧を求めて断食に身を任すことができるからである。檻は断食芸人を閉じこめはするが、断食に没頭することを可能にした。檻のなかにあつては、彼は吐気をもよおさせる食べものから解放されるし、それに係る生活をも免れて自分の内なる欲求に従い、自分の意志を実現することが可能になる。

だが断食が見せものとして提供されたとき、こうした「檻のなかの断食芸人」の与える衝撃性も取除かれてしまう。断食は娯楽として消費されることになるからである。見せものであるかぎり、人々は何の衝撃も受けることなく、安心してみていることができる。興行主が加える断食期間の制限も、断食が見せものとして成立するためには必要な条件だった。断食が40日を越えたとき、観衆の関心は衰退していくが、この現象にはたんなる表面上のことのほかに、「断食」とからんだ別の本質的な理由が含まれているように思われる。つまり断食がいつはてるともなく続けられたとき、人々は次第に断食芸人のいまだ自覚されていない力を本能的に嗅ぎつけて、そこから遠ざかろうとするのである。断食は見せものを離れて次第にその本質にあるものをにじみ出してくるからである。断食がどこまでも続けられれば、それは見せものとしてよりも、断食芸人だけの断食という性格を強め、ついには観衆の手を離れてしまう。そうした深刻かつ真剣なものとなることは観衆も興行主も望まない。断食芸人がどこまでも断食しつづけることに彼らは耐えられない。だから彼らは断食に様々な制約を加える。断食は彼らにとってあくまでも娯楽でなければならない。

また他方断食芸人は檻のなかへ「逃避」したともいえる。そうすることによって社会的な関係を断切って世間の様々な制約(掟や秩序といったもの)を免れ、ひたすら自分自身と向き合おうとする。檻は社会のなかに組入れられて機能として働いていた自分を救い出し、息苦しさ(吐気)をおぼえた断食芸人を孤独のなかへ導く。そうした場としても働いている。檻はいわば積極的な逃避の場である。彼は檻に入ってはじめて自己を実現する機会をえることができる。檻は社会との関係を遮断し、それと気づかずに屈していく四囲の暴力から断食芸人を守るとともに、彼に孤独を強い、自分自身と向き合わせる場である。したがって、檻は逃避の場であり、同時に自分を救える場、自己実現の場である。この檻がなくては彼の断食も困難になる。このことは、世界にあってはもっぱら未知の糧の探究に身を委ねることが不可能になってしまったことを意味している。それが人間のおかれた過酷な状況である。檻は救いの場としてある、だがそれはいかにも「小さな空間」である。

こうした意味も、しかしながら、断食が見せものにされたとき、やはりけしとんでしまう。社会はその強力な咀嚼力をもってこうした断食をも自分のなかに組入れ、ひとつの役割に化してしまった。こうなったのも、もとはといえば、断食芸人が断食を芸として見せものにしたことにあるのだから、その責任は彼自身の側にある。この誤りのために、断食芸人は見せものとなっているかぎり、永久に未知の糧から締め出されてしまい、彼の孤独も

またけっして孤独となりえないで、みせかけの孤独にとどまる。

もし断食芸人が断食を芸に仕立てることを、断食への衝動と生への欲求という相反する欲求を統合する折衷的な方策として考え出したのなら、これは大いなるまやかしである。こうした小手先の方策に基いた断食からは、不満と絶望しか生れない。それは永続的な価値をもちえないのだから。彼は断食する自由をすら、中断させられることによって奪われるのだから、彼の断食の自由もまたあの名声と同じように、みせかけの自由でしかない。断食の自由は、その性質上、世界と戦うことによってかちとられるべきものである。その戦を放棄して世界との折合いをとるのなら、そこからは断食の自由も生れない、したがって生きる自由も生れない。

観衆は表面のみをみ、そこからセンセーショナルなものや楽しみとなるものをひき出してはそれに引かれる。これは、彼らが内的法則と結果をもたないからである。彼らの興味や関心が流行から流行へと流れるように、彼らの生も流れ去り、消費される。こうした中心の欠けた人々には、断食芸人の食欲は無縁である。それだけに彼らは幸福だが、またその幸福ゆえに不幸ともいえる。

だがそうした彼らも、断食芸人のもつ重みを目にしていけないわけではない。「体は衰弱しきっていた。両足は自己保存の本能からしっかりと膝のところで合わさっていたが、地面をひっかいていた。まるでそれは本当の地面ではないかのように。本当の地面を両足はまず求めている。そこで、肉体の全重量が(といってもたいそうわずかな重みだが) 婦人のひとりにかかっていた。はげしい息づかいをしながら——彼女はこの名誉の大役がこのようなものだとは思ってもよらなかった——最初は首をできるだけのばして、少なくとも顔だけは断食芸人に触れないようにしたが、しかしやがてこれもかなわなかった。そして幸運な仲間の婦人は、彼女を助けにもこないで、ただふるえながら、断食芸人の手を、この小さな骨の束を両手にかかえてもっていただけだった。」(S. 260) とるに足らない体重しかない断食芸人をいざ運ぶ段になると、それはみかけとは逆に、支えきれないほどの重みをもっていた。この断食芸人の重みは、「本当の地面」、安心してそのうえにたって生活できる真実を求める人間の生のもつ重みにほかならない。

「ある日、気がついてみると、甘やかされた断食芸人は享楽欲の強い大衆によってみすてられていた。彼らはむしろほかの見せものに殺到した。」(S. 262) 観衆は移り気だから、彼らの目をひく新しい見せものが出現したとき、以前の見せものには見向きもしなくなる。それが流行というものである。これは早晩、断食芸人にふ

りかかる運命であった。観衆に見すてられた断食芸人は、興行主と別れてある大きなサーカスに移る。断食芸人をおそったこの状況の変化は、彼自身の内的状況の変化だとか、精神的発展や成長とかによるものではなく、もっぱら外側から強要されたものであった。自発的なものでも、彼自身の積極的な態度決定の結果でもない。

この事態の変化によっても断食芸人の芸そのものには何の変化もない。ただ「幾千とも知らない人々の歓声にとりかこまれていた人物」も、いまは本当の見物人をもたなかった。観衆あつての見せものだから、観衆がいなくなったとき、もはや断食芸は見せものとしての基盤を失う。それにもかかわらず、彼は熱狂的に断食をつづける。ほかの職業に就くにはあまりに年をとりすぎていることもあるが、それ以上に断食芸人の側の問題がある。サーカスに移っても断食は見せものであり、職業である。彼の断食にはまだ本質的には何の変化もみられない。

「彼(断食芸人)の意志をとおさせてくれるなら、(そしてひとは彼にただちにこれを約束した) 今度こそほんとうに世間をあつといわせてみせる」(S. 263) と断食芸人は主張する。新しい事態は、断食芸人にとって自己の存在を問ひ質す契機とはなりえていない。断食芸人がしばしば忘れる「時代の風潮」というものを考えてみれば、微笑をさそうだけの主張であるにもかかわらず、彼は人に注視されたい、人をあつといわせたいという欲求をすててはいない。この欲求はすでに彼の生きる目的になってしまっている。(S. 264) 彼はけっして大衆の目から身を隠したわけではなかった。¹⁸⁾

サーカスでの断食芸人には、もはや昔日の栄光はかげもかたちもない。観客の関心は動物にあって、「彼は、正確にいって、動物小屋へいく途中の障害物でしかなかった。」(S. 265) 彼は観衆にとっては目の片隅をかすめるものでしかない。そのうえ障害物といっても「もちろん小さな障害物、ますます小さくなっていく障害物である。」(S. 265) 彼はますます人々の視野からこぼれて、障害物としても意識されなくなり、ついには藁の下に沈んで見えなくなってしまふ。

いつかは断食芸人も世間の人々の視野から自分の存在が消えたことを認めずにはいられなくなる。そのときはじめて、断食芸人は終りのない断食への内なる欲求に従って、彼の使命を実現することができるようになる。¹⁹⁾ (S. 266) 断食は本来の意味をとり戻すのである。そして断食芸人は、はじめて本当の自由を獲得する。見せものであったとき、いかに喝采を送られ、栄光に浴そうとも、けっして実現されることのなかったことである。人々に忘れられ、人目のつかない片隅に身をおき、まったくの孤独になって、匿名のものなかに降りたつたと

き、自分の内の声に誠実に耳を傾け、自己の使命に忠実に従うことができた。過去は消えて、職業と使命(天職)とは分離された。ここに至るまでの事情がたとえ外部からの強制によるものであったにしろ、流行の外におかれたということは、断食芸人にとって決定的な転換点であったことにちがいはない。(またこの点がこの物語の構成上からも転換点になっている。)

断食芸人は、世間から忘れられたことで、わずかに世間との間をきり結んでいた名声も職業も消えて、完全に世間から落ちこぼれる。²⁰⁾ このとき、断食をとめるものも、世間と断食芸人との間をとりもつ興行主のような人もいない。したがって、断食の内包する死の危険から救い出してくれるものはいなくなった。その代りに、断食芸人はいままですもいだいていた不満と絶望とから解放されて、断食の本質をみすえることができるようになった。それ故、彼は死の直前にあっても「たとえ誇りたかくなくとも、確固とした確信」(S. 267) をもって断食をつづけようとするのであり得るのである。本当の食べものは死を代償としてえられるのかもしれないし、また死の彼岸にあるのかもしれないが、その本当の食べものを求めて努力するとき、人間が本当の意味で人間として生きることが可能になる。「彼の孤独は、彼の悲しい運命ではなく、自己を実現するためには必要不可欠な前提である。」²¹⁾

いよいよ愈願の最も偉大な断食芸人になれるというとき、皮肉なことにもはやそれは何の意味も価値ももたなくなってしまう。断食そのものからは、いかなる付随的な価値も利益も引出せなくなる。そのときが、断食そのものが彼の生きる目的と化す瞬間になる。彼はそのとき、断食せずにはいられなかった欲求が自分にとってどのような意味をもつものであったか、という問と向き合わざるをえなかっただろう。断食ははじめて根底において理解される機会を与えることができた。こうして断食は未知の糧を求めるものとして、断食がもともとつあの求心的(求道的)・探究的性格をかちえて、根源へと向かう「祈の形式」となった。

生きるということは私的な活動であり、自らが戦いとるべき性質のものである。ここは他のいかなる人も立ち入ることのできない領域であり、その戦はその人だけと定められた戦である。真実に立った生活を実現しようとするとき、きわめて困難な状況におかれていることにはじめてわれわれは気づくのである。あのサーカスにおいてみられるように、すべてのものが相対化され、その個有の性質と価値と意味とを剥奪されている。²²⁾ 動物であれ、人間であれ、ましてや装置にいたってはなおのこと、すべてのものが交換可能なもの、補充可能なものとしてある。これはまた、観衆の陥っている状況でもあ

る。断食芸人はそこからの脱却を志し、断食に身を委ねた。

断食が芸に仕立てられて職業となったとき、これもまた社会において交換可能なひとつの機能に堕し、断食芸人自身も機能的存在と化してしまった。(S. 263) ここから脱して自分を救おうとすれば、孤独と沈黙の支配する匿名のものの世界へ入るよりほかない。そのとき世界と戦い、真実を自分のうちから生み出すことが可能となる。この自由を世間の人たちは恐れる。

この物語は、断食芸人の死で終わってはいない。断食芸人が糞と一緒に虫ケラのように片づけられた後の檻には、若い豹が入れられた。この猛獣は断食芸人と対照をなすものである。²³⁾「豹には何ひとつ欠けているものはなかった。豹の口に合う食べものを、監視人が長いこと思いわずらうこともなく運んできた。自由さえも豹には欠けていないらしかった。必要なものはすべてをはちきれんばかりに身につけたこの高貴な肉体は、自由を身につけてもち歩いているようであった。歯のどこかに自由があるらしかった。生のよろこびがかつとひらいた口からはげしい熱をともなってあふれ出す。この熱に対抗することは、見物人たちにとって容易なことではなかった。しかし彼らはそれにたえ、檻をとり囲んでそこから立ち去ろうとはしなかった。」(S. 268)

豹は檻のなかにいることを少しも苦にしていなければ、生のよろこびにみちている。この動物はいかなる制約も意に介さない。自由の欠如すら気にならない。いな、自由の欠如ということを知らない存在である。それは、いいかえれば、いたるところにありながら決して認められることのない、ある不可能性を示すしるしである。豹の生は、反省を知らない生といえる。²⁴⁾この猛獣も、断食芸人と同じように、檻をもちあるいてはいるが、断食芸人にとってもちえたような意味をこの豹の檻はもちえない。

豹はサーカスという社会において役割を演じることを強いられる存在である。言われるままに動き、サーカスという組織の一部として断食芸人の後に補充されたものでしかない。そうした自分にこの動物はいかなる反省も疑問も加えることがない。だから欠如の感覚も認識もなく、「必要なものはすべてもちあわせている」ように思える。欠如そのものからさえも締出されている、だから自由すらこと欠いていないように思える。豹の食べものは、すでにあるもののなかから選り出され、ひとから与えられるものであって自ら獲得したものではない。この動物はなるほど旺盛な生命力をもっている。だがそれは、たんなる「生としての生」でしかない。

見物人たちは、檻の存在すら無視してただ既存のあてがわれた食べもので満足しうるだけのこの動物のもつふ

てぶてしさと、旺盛な生命力に圧倒され、あこがれる。だれもが自分のあてがわれた役割を演じ、その役割の範囲内で活動することでたれりとする。これは自分の生をこの地上につなぎとめておくことのできる方策でもある。動物と断食芸人とが2つながら並べ置かれたとき、観衆にとって選択は容易になった。彼らは動物をとることによって生きる方を選ぶ。断食芸人の死後も、なお生活はつづいている。

観衆は断食芸人には耐えられなかった。彼らは断食のもつ破壊性をおそれ、自由をおそれる。平穩で安逸な生活を、また自明なものとさせていたものを根底から問い質し、疑問の渦のなかに投げこみ、そこから締出されているあの真実をえようと努力することをおそれる。そうした過酷さを自ら背負いこむことに耐えられないし、また好まない。それよりはむしろ現在の生活を選びとる。観衆は豹に幻想をみ、その幻想に自らを仮託するのである。

この最後の場面は、断食芸人の孤独のなかの死ののちにも、やはり生活はつづいていることを示している。暗く長いトンネルが突然きれて光がどっととびこんできたような印象を与える。だがまたこれは、よろこびというよりはむしろ恐怖の絶頂である。

カフカは最後にいたって断食芸人の死後に若い豹をおいたが、これはけっして断食芸人の生を相対化したり、否定したりするものとして意図されたことではない。むしろ断食芸人によせるあまりに肯定的すぎる判断や評価に制限を加えるものとして作用しているとする方が妥当であろう。²⁵⁾

断食芸人の生は、真実にたった生活をせずにはいられなかったものが生きる生である。それにはいかなる是非の判断も下しえない。たとえ下しえたところで、断食芸人にとってはそれは何の意味ももたない。彼はやはり内なる要請に従って断食せずにはいられなかっただろう。そうせずにはいられないのが彼の生である。人間としての生を実現しようと努力する誠実さこそが、断食芸人を支えるものであり、彼の真実なのである。この物語は、観衆(世間の人々)の生に対する批判でも告発でも否定でもない。断食芸人だってみんなと同じ世界に住みたいと思う。だがどうしてもそれができない。ふつうの生活にあこがれながらも、それもかなわず、自己の使命に従って生きずにはいられない。断食は避けられない。それが彼のありようなのである。こうした断食芸人の生もあれば、観衆の生きる生もある。カフカはそれを並列した。

断食芸人は、カフカが書かずにはいられなかったように、断食せずにはいられなかった。それは、いわば「自己保存の本能」に基づくものであった。断食芸人は、死

の危険を内包する断食をどこまでも続けることによって、なるほど自ら死を招来する結果となったが、豹や見物人たちが締め出されている自分ひとりの「独自な死」を死ぬことができた。死の直前の彼の確信にみちた表情に自らの死を死ぬことができることに対する満ちたりた思いをみることはできないだろうか。

註

- 1) Vgl. Henel, I.: Ein Hin Hungerkünstler, S. 243f.
- 2) Vgl. Hillmann, H.: Franz Kafka, S. 88.
- 3) Vgl. Hillman: a. a. O., S. 84.
- 4) Vgl. Hillman: a. a. O., S. 84., von Wiese: Ein Hungerkünstler, S. 333.
- 5) Vgl. Hillmann: a. a. O., S. 91.
- 6) Janouch: Gespräche mit Kafka, S. 224.
- 7) Vgl. Hillman: a. a. O., S. 87.
- 8) Vgl. Henel, I.: Ein Hungerkünstler, S. 238.
- 9) Vgl. Hillmann: a. a. O., S. 89.
- 10) Vgl. Hillmann: a. a. O., S. 89f.
- 11) Janouch: a. a. O., S. 48.
- 12) Vgl. Hillmann: a. a. O., S. 87.
- 13) Henel: a. a. O., S. 243.
- 14) Vgl. Hillmann: a. a. O., S. 85.
- 15) Vgl. Henel: a. a. O., S. 238., Politzer: Franz Kafka, der Künstler. S. 431.
- 16) Vgl. Henel: a. a. O., S. 238., von Wiese: Ein Hungerkünstler, S. 334.
- 17) Vgl. Janouch: a. a. O., S. 44.

『『だれもが自分のもちあっている格子のなかで暮しています。だからいま、そんなにもたくさん動物のことを書くのです。それは自由な、自然な生活への憧れの現われです。人間にとって自然な生活とは、しかし人間の生活です。ところがそのことが分からない。それを分かろうとしないのです。人間としての生活はあまりに困難になっています。そのため人は人間としての生活をせめて幻想のなかでふい落そうとするのです。』(中略)

『……人は動物にかえります。その方が人間としての生活よりもずっと容易なのです。家畜の群にうまくまぎれて、人は町の通りをとって仕事場に向かっていきます。飼葉桶と楽しみに向かっていきます。それは、役所におけるのと同じように、綿密に

計られた生活です。奇蹟などない、あるのはただ使用説明書と書式と規則だけです。人は自由と責任とを恐れます。それゆえに、むしろ自ら組み立てた格子のなかで窒息する方を選ぶのです。』

- 18) Vgl. Hillmann: a. a. O., S. 88.
- 19) Vgl. Hillmann: a. a. O., S. 86., Henel: a. a. O., S. 243.
- 20) Vgl. Hillmann: a. a. O., S. 91.
- 21) Henel: a. a. O., S. 243.
- 22) Vgl. Hillmann: a. a. O., S. 92.
- 23) Vgl. Hillmann: a. a. O., S. 91.
- 24) Val. von Wiese: Die Selbstdeutungen einer modernen dichterischen Existenz, S. 242.
- 25) Vgl. Hillmann: a. a. O., S. 91.

テ ク ス ト

Franz Kafka: Gesammelte Werke, hrsg. von Max Brod. Erzählungen, Frankfurt a. M., S. Fischer Verlag, 1967.

(文中の数字は本書のページ数を示す)

参 考 文 献

- Janouch, Gustav: Gespräche mit Kafka. Aufzeichnungen und Erinnerungen., Frankfurt a. M., 1968.
- Henel, Ingeborg: Ein Hungerkünstler. Deutsche Vierteljahrsschrift XXXVIII (1964) S. 230-247.
- Hillmann, Heinz: Franz Kafka. Dichtungstheorie und Dichtungsgestalt, Bonn 1964.
- Kraft, Werner: Franz Kafka. Durchdringung und Geheimnis, Frankfurt a. M. 1968.
- Politzer, Heinz: Franz Kafka, der Künstler. Studienausgabe, Frankfurt a. M., 1965.
- von Wiese, Benno: Franz Kafka. Ein Hungerkünstler. In: Die deutsche Novelle von Goethe bis Kafka. Interpretationen. Bd. 1., Düsseldorf 1971, S. 325-342.
- von Wiese, Benno: Franz Kafka. Die Selbstdeutungen einer modernen dichterischen Existenz. In: Zwischen Utopie und Wirklichkeit. Studien zur deutschen Literatur., Düsseldorf 1963, S. 232-253.